

Contents

- 特集：巻頭エッセイ「九州大学で活躍する女性たち」
- 連載：室長コラム
- 仕事と家庭の両立・育児体験記「ワクワク・ライフ・バランス」
- イベント開催報告
- 数字でみる九州大学と男女共同参画（第6回）
- 発表！ 令和5年度伊藤早苗賞
- 男女共同参画推進室 蔵書紹介
- 広報誌『ポリモルフィア』Vol.10 投稿・寄稿原稿の募集！
- 編集後記

特集 巻頭エッセイ

九州大学で活躍する女性たち



先導物質化学研究所

山内 美穂 教授

／ご経歴／

2001年、筑波大学大学院博士課程化学研究科修了、博士（理学）。九州大学大学院理学研究院、北海道大学触媒化学研究センター、九州大学カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所を経て、2021年から九州大学先導物質化学研究所所属。専門は、固体物性化学、ナノ科学、触媒化学。

研究経歴

私は、固体NMR（病院で使うMRIのような装置）を使った測定を行って博士の学位を取得しました。それ以降、九大理学部では金属ナノ粒子、北大の触媒センターではナノ粒子の触媒利用について研究を始めました。カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所に赴任してからは、電気化学的二氧化碳素還元（電気エネ

ルギーを使って水と二酸化炭素から化学原料を作る）や、アンモニア合成（窒素と水素からアンモニアを作る）のための触媒開発を本格的に行っています。もともと測定屋なので化学反応について研究するとは露程も考えていませんでしたが、始めてみると面白いもので、今は、化学反応が進むナノ材料の表面・界面に興味を持って研究を行っています。

どうして大学の研究者になったのか？

私が学位を取得した年は2001年、バブルが弾けた就職難の真っ只中でしたので、21世紀最初のドクターだと浮かっている場合ではなく、仕事をみつけれられるのか本当に先が見通せない状況でした。第二次ベビーブームの時に生まれ、受験戦争、就職難と常に困難に直面するまったく損な世代に生まれたものです。実家に帰った時でしょうか、母がふと私に言いました。「お姉ちゃん、一般的な会社ではまだまだ女性の地位は確立されていないよ。会社より大学で研究をする方が良いと思うな」と。本当に些細な会話でしたが、私はそれをきっかけに研究者の道に進むことを決めました。自分の頑張りが正当に評価されないのは嫌だという気持ちがありました。研究者に憧れているけど、大した研究成果も出ていないのに自分から研究者になるとは言い出せなかったというのが本音だったかもしれません。しかし、

一歩踏み出してみるとなんとかなるもので、今でも研究に携わる仕事を続けています。博士課程修了後には長くて険しい修行の道を歩むことにはなりましたが。

なぜダイバーシティが重要なのか？

最近では組織の女性比率の向上が問題に上ります。私は、女性参画やダイバーシティの推進は、女性の活用という意味でなく、組織の機能性を向上させるために本当に必要だと思います。同じ価値観を持つ人間ばかりで構成される組織の出ず結論が画一的になるのは、至極当たり前のことです。一方、異なる経歴を持つメンバーばかりが集まったら、結論を導くためには相当な時間がかかるでしょう。それでも、その組織が十分な統合力と柔軟性を備えていれば、発展的なアイデアを生み出すチャンスが生まれます。日本の研究力の低下は、組織の同質化に根本があるように思いますので、科学研究の発展のためにはダイバーシティの機能を取り入れて、より柔軟性のある研究環境を作ることが重要だと思います。

若い方へのメッセージ

野球の大谷選手やハーフパイプの平野選手など、想像を遥かに超える活躍をする若い方がたくさんいらっしゃいます。私が心配することも言うことも何もありませんよね（笑）。

室長コラム

積極的改善措置



ダイバーシティ担当理事・男女共同参画推進室長 神崎 智子

「女性研究者の積極採用」についてお話をすると、「女性を優遇する女性枠は逆差別」、「女性を採用すると研究の質が落ちる」という声が返ってくる場合があります。

そこで今回は、法律に定められた「積極的改善措置」(ポジティブ・アクション) についてお話します。

男女共同参画社会基本法には、「(自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する) 機会に係る男女間の格差を改善するため必要な範囲内において、男女のいずれか一方に対し、当該機会を積極的に提供する」という「積極的改善措置」が規定されています(第2条)。

過去における社会構造的な差別によって今不利益な条件に置かれている集団に対しては、機会の平等を謳うだけでは不十分であるため、実質的な機会均等を実現するためには、暫定的に特別な機会を提供することが必要であるというのが、法律の趣旨です。

男女共同参画社会とは、すべての個人の能力が最大限に発揮される社会ですが、我が国の現状をみると、女性は、これまでの社会通念や慣行のために、自分の能力にあった教育や仕事の機会を得ることができていない分野があるため、積極的改善措置によってその機会を与えるという考えが生まれたのです。

日本が、40年近く前に批准した「女子差別撤廃条約」にも、「男女の事実上の平等を促進することを目的とする暫定的な特別措置をとることは・・・差別と解してはならない」(第4条)と明記されています。男女雇用機会均等法にも「事業主が、雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保の支障となつている事情を改善することを目的として女性労働者に関し行う措置を講ずることを妨げるものではない」(第8条)と規定されています。ですから、女性の比率が著しく低い部局で女性限定公募を行うことに問題はありせん。

しかしながら、数合わせで、女性なら誰でも採用すればよいわけではなく、採用審査にあたっては、選考基準を明確にし、厳正な審査をすべきなのは言うまでもありません。それは、性別に関係なく、選考の基本です。

さらに大切なのは、積極的改善措置は、女性が男性と同じ研究のスタートラインに着く機会の提供ですから、女性が組織に定着し、研究のリーダーとなれるように、男性と同様に、海外の研究所への派遣や重要な研究発表の機会提供など、研究者としての育成が必要です。男性であれ、女性であれ、人材育成が行われなければ、能力の向上と発揮はできないのであり、それは採用された側でなく、部局や上司の問題でもあります。

冒頭のような声は、女性の積極的採用に対する無意識のバイアスがあると言えます。女性の積極的採用をマイナスのイメージに定着させることは、かえって女性の機会を奪うことになりかねません。制度の正しい理解と運用が求められます。

仕事と家庭の両立・育児体験記

ワクワク・ライフ・バランス

「次女の誕生がもたらした幸せな混沌」

システム情報科学研究院 教授 亀井 靖高

* 2023年6月～育児休業を取得(准教授)。今年1月1日付で教授に昇任。

2023年の5月末に次女が生まれ、その翌月より約1ヶ月の育児休業を取得しました。お互いの実家が遠方にあり、長女もいるため、次女の出生に際し早期から育休の計画を妻と話していました。育休を取るにあたって、割と早い段階で諸々の調整を進めなくてはいけないことや、私自身の研究室の運営はどうするのか?などの大変だったことや不安だったことがありましたが、幸いにも私の場合は、同研究院・学科の教職員の皆様や研究室のスタッフ、学生の支援により、これらを乗り越えることができました。本当にありがとうございました!

育休中は、授乳やオムツ替えをしている間に、あっという間に毎日が過ぎ去っていきました。そういった嵐のような日々でしたが、我が家にとって、若干赤ちゃん返りをした長女と共に、次女の新生児期を家族全員で過ごすことができたのは、大変貴重な経験でした。日々の成長を間近で見守ることができ、家族としての絆を深めることができました。

そして育休を通じて、既存のサポート制度の中には広く周知されていないものもあるということも今回の経験を通してわかりました。自分自身が育休をいただいて、次世代の父親のためにより良くしたい部分も明確になりましたので、その実現に向けて少しでも貢献できればと思っています。



イベント開催報告 1

「Open Café 2023 ～九大女子卒業生に聞く! 学生生活やキャリアについて」を開催しました

令和5年11月4日(土)、本学の「アカデミックフェスティバル」の一環として「Open Café 2023 ～九大女子卒業生に聞く! 学生生活やキャリアについて」を開催しました。参加者が一堂に会しての対面開催は、4年ぶりでした。

今年度は、本学理学部を卒業された2名を講師にお迎えしました。お一人は、福永憲子氏(パナソニック ハウジングソリューションズ(株) 人事・総務部)、もうお一人は、才田聡子氏(北九州工業高等専門学校 准教授)です。

福永氏は、ご自身のキャリアの転機を振り返りながら、思いがけない出来事にも真摯に取り組むことで道は拓けるとお話されました。続いて、才田氏はポストドク時代に出産・育児を経験したエピソードを紹介しながら、普段から職場で良好な人間関係を築くことが大切であるとアドバイスされました。

その後、2つのグループに分かれて交流会を開催しました。参加者からは、在学中にできることや挑戦した方がいいことについて活発な質問が寄せられました。参加者の中には学生も多くいましたが、あらためて卒業後の進路やキャリアについて考える大変良い機会となりました。

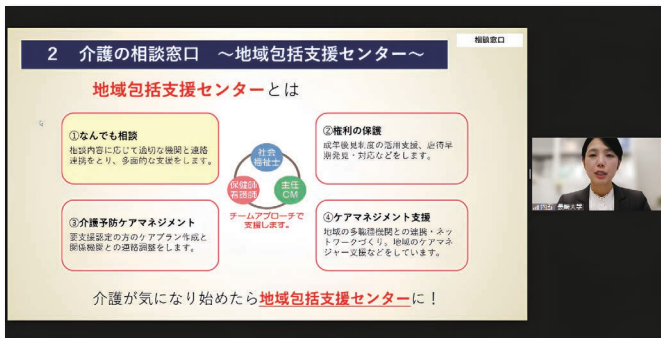


イベント開催報告 2

R5年度ワーク・ライフ・バランスセミナーを開催しました

令和5年11月21日(火)、ワーク・ライフ・バランスセミナー「身に付けよう介護の知識～自分のために～」をオンラインで開催しました。

今回は、長崎大学ダイバーシティ推進センター・介護コンシェルジュの内野睦美氏に講師をお願いして、これから介護を行うにあたっての心構えや介護保険制度の概要についてお話いただきました。



内野氏は、介護はいつ始まりいつ終わるかが分からず、誰もが将来的に介護者となる可能性があるとして述べられました。そして、いざ介護と向き合う時がきても慌てることのないように、普段から十分な情報収集を心掛けておくことが重要であると説明されました。また、介護を行う側に金銭的・精神的な負担が集中しないよう、無理のない範囲で介護に携わることが大切であるとアドバイスされました。

終了後に実施したアンケートでは、「介護を行う必要が出てきた時の心構えを学ぶことができ、参考になった」「お話が丁寧で分かりやすかった」「『自分のことを大切に』というメッセージは新しい見方を与えてくれた」との感想が寄せられました。

イベント開催報告 3

霜月ランチタイム交流会を開催しました

令和5年11月27日(月)、霜月ランチタイム交流会を開催しました。今回のテーマは「子どもを連れて出張へ～経験談と制度の紹介」です。当日はオンラインで36名の参加がありました。

まず、男女共同参画推進室から、子の帯同出張に関する学内制度の紹介がありました。令和4年度に、新たに「子の出張帯同支援経費の取り扱い」が設けられ、外部資金や寄付金の交付元が認めている場合に限り、子どもの帯同出張に係る交通費を支援することも可能になったと説明しました。

続いて、実際に子どもを連れて出張した経験のある教員にお話を伺いました。今回は、工学研究院の坂東麻衣教授、同研究院の若林里衣准教授、そしてシステム情報科学研究院の山内由紀子教授の3名です。それぞれ事前準備や手続で苦労したことなど、実際に経験したからこそわかるリアルな声を紹介されました。また、分からないことがあればどんどん周囲に尋ねることが大切だとのアドバイスがありました。

最後に、質疑応答の時間が設けられました。今回の参加者には、子育て中の女性研究者や男性研究者も多くいたため、活発な情報交換が行われました。

九州大学男女共同参画推進室
オンライン開催 (ZOOM)
霜月ランチタイム交流会
子どもを連れて出張へ
～経験談と制度の紹介
2023年 11/27(月) 12:10～13:00

家族の状況により、お子さんを連れて出張せざるを得ないことがあるかもしれません。そんな時、お子さんのケアをどのようにすれば良いか戸惑うことも多いのではないのでしょうか。
今回の交流会ではお子さんを帯同される時に一定の条件下で利用できる制度を紹介いたします。また、実際に国内あるいは海外へお子さんを連れて出張された方に事前の準備や現地での留意点など色々な経験を紹介していただきます。経験談をお聴きした後は、質疑応答や意見交換などで情報交換いただけます。
興味・関心のある方は是非ご参加ください。

制度紹介：男女共同参画推進室 上瀬恵里子 教授
話題提供1(国内出張) 若林里衣 准教授
話題提供2(国内及び海外短期出張) 山内由紀子 教授
話題提供3(海外短期及び長期出張) 坂東麻衣 教授
質疑応答・意見交換

九州大学男女共同参画推進室
TEL: 092-802-2034
URL: http://danjyo.kyushu-u.ac.jp
E-mail: event@danjyo.kyushu-u.ac.jp

お申し込みはこちら
http://danjyo.kyushu-u.ac.jp/form

数字でみる九州大学と男女共同参画

第6回

30%

この数字は、九州大学の学部在籍者に占める女子の割合です。国立大学協会が令和4年に発表した全国平均の37.9%¹を下回っています。その理由として、理工系の学部における女子の少なさが指摘されます。例えば、理学部の男女比は84%：16%、工学部の男女比は90%：10%にとどまっています。女子は全体の1割程度にしか達していません。また、親が子どもの学歴に対して抱く期待が、その性別によって異なるということがあります。「女子に大学は必要ない」「浪人はさせない」「自宅から通える範囲の学校でよい」といったものです。こうしたステレオタイプは、特に理工系で一層強まるといわれます。そして、親や教師に期待されていないと思込んだ女子学生が、自分の能力を過小評価し、自ら進学先の選択肢を狭めてしまうのです。このように、女子は男子と比べて、進路選択の段階からジェンダーによる影響を受けていると考えられます。

1 国立大学における男女共同参画推進の実施に関する 第19回追跡調査報告書 https://www.janu.jp/wp/wp-content/uploads/2023/02/202301houkoku_01.pdf (最終閲覧日:2024年2月7日)

発表！令和5年度伊藤早苗賞

九州大学は、平成30年度から優れた研究成果を挙げた若手女性研究者及び女子大学院生を表彰する制度を実施しています。第6回目を迎えた今年度は、以下6名の方々が受賞者に決定しました。

若手女性研究者部門 ★ = 受賞コメントおよび研究内容のURL

- 最優秀賞** 藤川理沙子 (薬学研究院・助教)
★ <https://youtu.be/ZwmPvAYqpio>
- 優秀賞** 木下 博子 (留学生センター・准教授)
★ <https://youtu.be/1FIEs8oFz0k>
- 王 青 (総合理工学研究院・助教)
★ <https://youtu.be/c-YbEUrB4z4>

女子大学院生部門 ★ = 受賞コメントおよび研究内容のURL

- 最優秀賞** 宮崎 菜 (理学府・博士3年)
★ <https://youtu.be/Dkh6-RTTWzY>
- 優秀賞** 松瀬萌々香 (法学府・修士2年)
★ <https://youtu.be/I-V3FnqGC4c>
- 立石 千瑳 (医学系学府・博士4年)
★ <https://youtu.be/RLBKQSqwxYc>



令和5年10月24日(火)には、椎木講堂特別応接室にて表彰式が行われました。受賞者には石橋総長から表彰状ならびに盾、また「九州大学伊藤早苗記念基金」から副賞の研究費が授与されました。その後、受賞者による受賞内容の紹介や、石橋総長との懇談が行われました。

男女共同参画推進室 蔵書紹介

『ジェンダー事典』

- 著者名：ジェンダー事典編集委員会 編
松本 悠子 編集委員長 伊藤 公雄 編集幹事
小玉 亮子 編集幹事 三成 美保 編集幹事
- 出版社：丸善出版
- 発行年月日：令和6年1月
- ページ数：800ページ
- ISBN：978-4-621-30887-5



『ジェンダー』は性や身体、政治、経済だけでなく、宗教や芸術、教育など、あらゆる事柄と深く関連している。本事典では、「ジェンダー」に関する基本的なトピックから、学術・研究上のトピック、日常生活における身近なトピックまで、全18章345項目で網羅的に解説。総勢293名のさまざまな分野の専門家が編集・執筆に取り組んだ「読む」中項目事典。

広報誌『ポリモルフィア』Vol.10
投稿・寄稿原稿の募集！

男女共同参画推進室が年に1回発行している学術的広報誌『ポリモルフィア』では、投稿・寄稿原稿を募集しています。内容は、ダイバーシティ、男女共同参画、女性のキャリア形成等に関するものとします。皆様からの原稿をお待ちしています。

募集している記事

- ①論文
- ②研究ノート
- ③資料(史料) (データ分析、翻訳等を含む)
- ④書評
- ⑤研究動向
- ⑥活動報告
- ⑦エッセイ
- ⑧その他、編集委員会が認めたもの

お問い合わせ ポリモルフィア編集委員会事務局
polymorfia@danjyo.kyushu-u.ac.jp

*ポリモルフィアは、ギリシャ語で「多様性」を意味します。
*バックナンバーは、男女共同参画推進室のHPからご覧いただけます。



編集後記

今回、科研費(国際共同研究強化)のプロジェクトで滞在しているシンガポールから編集に携っています。昨年夏はSENTAN-Qの研修で、約3ヶ月台湾で過ごしました。いずれも母子滞在のため、夕方からの会合には、ラボに息子(5歳)を連れていく機会がありましたが、ありふれた日常として受け入れていただきました。その他、仕事においてジェンダーを意識することはほとんどなく、多様性・個の尊重の大切さを肌で学んでいます。(企画広報環境整備部門 安河内友世)

編集

九州大学男女共同参画推進室 企画広報環境整備部門 企画・広報WG
伊藤 裕之 (芸術工学研究院 教授)、森田 陽介 (数理学研究院 准教授)、安河内 友世 (歯学研究院 准教授)、渡邊 英雄 (応用力学研究所 准教授)、相良 祥子 (男女共同参画推進室 職域限定専門職員)

読者の声 /
をお聞かせください。
アンケートにご協力をお願いいたします。

